



Title	日本から海を渡った女教師たちとその表象
Author(s)	小橋, 玲治
Citation	
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/27375">https://hdl.handle.net/11094/27375</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 日本から海を渡った女教師たちとその表象

小橋玲治

### はじめに

堀内真由美氏の『大英帝国の女教師』（白澤社、2008年）の第III部で詳述されているように、19世紀後半から20世紀にかけてのイギリスにおいて、海外植民地に女教師を派遣する動きが見られた。詳細は堀内氏のご著書及び本報告書所収の講演録に譲るが、氏の研究によって、女性たちの「帝国」への貢献の一側面が浮き彫りになった。

あまり知られていない事実ではあるが、世紀転換期の日本においても海外に女教師を派遣しようという動きがあった。個人として名が挙がるのは内蒙ゴに派遣された河原操子（1903年12月～06年1月<sup>1</sup>）やその後任の鳥居きみ子（1906年3月～07年1月）、タイ（当時の呼び名は暹羅）に派遣された安井てつ（1904～07年）であり、そして組織としても女教師の海外派遣を目的に設立された東洋婦人会清国派遣女教員養成所を挙げることが出来る。個々の活躍に関しては先行研究があり<sup>2</sup>、それぞれにおいて同時代の動きとして他の派遣事業が紹介されることはあるても、当時のそのような動きを女教師の海外派遣事業という枠組みで捉えているものは存外少ない。これは、20世紀初頭における数少ない女性個人の活動として、いわば「個人史」の枠組みで捉える研究、もしくは内蒙ゴやタイといった地域研究の対象となってきたことにも原因があるであろう。しかし、例えば女性を主な読者としていた『婦女新聞』第210号（1904年5月16日）の社説に「在外の二女史」として、同時期に海外に渡っていた河原と安井が紹介されているなど、同時代にあっては海外で活躍する女性として両人が取り上げられている記事はかなり多い。確かに本稿自体先行研究に負うところは大きいのだが、総体として、すなわち「女教師の海外派遣事業」として彼女たちの活動を見た場合、個人としての活動以外の別の面をこの動きのうちに見ることも可能になるだろう。そして、その視座を以て同時代の文学作品を振り返ってみた時、興味深いことに気づくことになる。当時の作品の中で、職業を持った女性が海外に行くという構

1 前年にまず上海の務本女学堂（清で最初の東洋人経営による女子のための学校）に派遣されている。

2 内蒙ゴに派遣された河原と鳥居を扱ったものとして山崎朋子「蒙古女子教育に尽した日本女性—河原操子と鳥居きみ子」（『アジア女性交流史 明治・大正期編』、筑摩書房、1995年）、ウ・ムングンゲル「モンゴル人子女教育に貢献した2人の日本人女性」（『旅の文化研究所研究報告』12巻、2003年）がある。主に河原を扱ったものとして吉村道男「日露戦争の日本の対蒙ゴ政策の一面—「喀喇沁王府見聞録」について—」（『政治経済史学』300号、日本政治経済史学研究所、1991年）、James Boyd, 'A Forgotten 'Hero': Kawahara Misako and Japan's Informal Imperialism in Mongolia during the Meiji Period', *Intersections: Gender, History and Culture in the Asian Context*, 11 (2005)、鳥居を扱ったものとして小長谷有紀、オロドンナ「蒙古行（鳥居きみ子）」（『日記に読む近代日本5 アジアと日本』、吉川弘文館、2012年）がある。安井を扱ったものとしては、吉川敬子「安井哲とタイ皇后女学校 日・タイ女性教育交流史」（『朝日アジアレビュー』7(3)、1976年）、「安井哲とタイ国の女子教育」（『国立教育研究所紀要』115号、1988年）が挙げられ、平松秀樹「ククリット・プラモート『シー・ペンドイン(王朝四代記)』と“クンラサトリー”：タイ近代女子教育の日本との関わりの考察とともに」（『待兼山論叢』文学篇42号、2008年）でも、タイ近代女子教育の日本との関わりという点から安井が取り上げられている。そして、東洋婦人会に関する研究は、董秋艶「草創期東洋婦人会に関する研究」（『教育基礎学研究』7号、2009年）で触れている程度である。

図を持つ作品が一定数存在しているという事実である。本論文では、職業を持った女性が海外に渡るという事象、特にそれが組織化されて行われていた教師の場合を取り上げ、彼女たちの動きがいかに当時の日本の急速な帝国化と呼応していたのかを検討する。これにより、彼女たちがいかに積極的に「帝国」に貢献したのかが明らかになるであろう。それを踏まえた上で、ではその動きがどのように社会から認知されたのか、そして同時代に起きた女性が海外へ渡航するという現象を作家たちがどのように解釈し、表象したのかを分析する。これにより、「女性の海外渡航」という現実と表象の間にどのような相克が生まれているのかを検証することが本稿の目的である。

## 1. 日本の「膨張」と教育

徳富蘇峰が日清戦争と同年に『大日本膨脹論』(民友社、1894年)を発表したことに端的に表れているように、明治期において初の対外戦争である日清戦争の前後において、日本の海外への興味は急速に高まっていった。それは海外に人民を送り込むこと、すなわち「殖民」という形で喧伝された。日清戦争の前年の3月、榎本武揚を会長として殖民協会が設立されている。協会誌である『殖民協会報告』を見ると、殖民の方法において、同じく島国であるイギリスを手本の一つとしていたことがよく分かる。第一号には「英國殖民移住ニ関スル報告」が掲載されている。

- 本報告書ハ在英京大越領事ヨリ其筋へ報告セラレタルモノニシテ殖民上頗ル緊要ノ材料少ナカラザルヲ以て特ニ是に掲載ス
- 第一 英国属地及外国へ殖民及移住ニ関スル計画
  - 第二 殖民調査委員 (Select Committee on Colonisation.) ノ意見
  - 第三 移民教示局ノ組織及其事業 (Emigrant information office)
  - 第四 英國殖民事業ノ教育 (下線は筆者による、以下同様)

すでにこの時点で「教育」が一項目として挙げられており、殖民事業において教育が重要なものとして認識されていたことがよく分かる。しかし、注意しておきたいのは、この「教育」が決して殖民の地における子弟教育を意味していないことである。すなわち、ここでの教育とは、あくまで現地において生存していくために必要な知識の受け渡しであって、例えば殖民先にあって日本語を学ぶ、といったことはこの段階では想定されていない。そして、殖民協会について検討するにあたって重要なのは、この動きが男性主導によるものであるという点である。殖民協会の監事たちの一覧を見れば、そこに女性の名が一切ないことが分かるであろう。その殖民協会に女性の入会者が現れると、それだけで新聞記事となってしまう。『読売新聞』1894年4月27日付朝刊には、「女教師、殖民事業に熱心を」という記事が見られる<sup>3</sup>。記事によれば、「近時国事に感あり」と思い至った山内美根子なる女教師が、「自ら率先者となり日本の婦人社会に殖民思想を發揮せしめ併せて殖民事業を奨励せん」という目的のために入会に至った。「同会規則にハ別に

<sup>3</sup> 『女学雑誌』第378号（同年5月5日）にも同人の記事が掲載されている。

婦女の入会を禁ずるの明文なきのみならず其志大に嘉みすべし」という文面からは、彼女が協会にとって初めての女性会員であったと取れるし、うがった見方をすれば、女性がこの協会に入会することは最初から想定されていなかったとも考えられる。いずれにしても、記事の論調としては「是より婦人社会に殖民の声を聞くに至るべし」として、この女教師が最初に門戸を叩いた、その行動が殖民事業における女性たちのさらなる参画を促すことを期待しているように見受けられる。

ここで注目したいのが、最初の殖民協会の女性会員が女教師であったという事実である。すなわち、男性の領域として想定されていた殖民事業に初めて実際に踏み込んだ女性は、明治にあって「職業婦人」としてほぼ最初に登場した教師という職に就いていたのである。これは決して偶然ではあるまい。というのも、男性のみで構成された領域に飛び込んでいくためには、彼らと比肩するだけの能力や度量がなければ、当時の女性には不可能なことであり、それが可能となるのが教師という、それなりの能力が前提となる職を持った人物ゆえだからである。が、続報が無いため、この女教師が実際どの程度協会内において活躍したかまでは分からぬ。

殖民事業における教育について触れたものは、それはあまり中身を伴わないものであった。だが、実際に海外において教育事業を行おうとする動きは、やはり日清戦争前後に現れている。押川方義らキリスト教者を中心とした大日本海外教育会の成立（1894年2月）がそれに当たる。「本会は海外に教育を施く事を目的と」し、「本会は最初朝鮮国の教育に従事す」とあるように、朝鮮半島でその活動を始めようとしており、実際1896年4月には京城に京城学堂を開いている（日語学校）<sup>4</sup>。女性にもそういった動きに呼応する者が現れた。代表的なのは、僧侶である兄の朝鮮半島における佛教布教<sup>5</sup>を助け、自らも光州で実業学校を創設（1898年）した奥村五百子であろう<sup>6</sup>。しかし、この動きは奥村個人の資質に負うところが大きく、大日本海外教育会のよ

<sup>4</sup> 稲葉繼雄『旧韓国の教育と日本人』（九州大学出版会、1999年）pp.140-146 参照。

<sup>5</sup> 奥村家は代々肥前唐津の真宗大谷派高徳寺住職であり、先祖は秀吉の朝鮮侵略と時を同じくして朝鮮に渡り、釜山に高徳寺を建立した。1877年、内務卿大久保利通と外務卿寺島宗則が東本願寺の法主巖如に朝鮮への布教を依頼すると、五百子の兄・円心にそれが託されたのも出自によるところが大きいようである。「奥村円心らは、一八九四年の甲午農民戦争前には、いわゆる「親目的」と目された開化派官僚たち（金玉均や朴泳孝ら）と接触を試みており、いわば日本政府と開化派の「パイプ役」を買って出たのである。このような活動が、一種のスパイ活動と目され、後に批判を受けることとなったのである。」（川瀬貴也「植民地朝鮮における日本佛教と宗教政策—浄土真宗を中心に—」『國學院大學日本文化研究所紀要 第89輯』2002年）

<sup>6</sup> 稲葉 pp.266-271 参照。それによると、その創設に大きく関与したのは大隈重信である。元々大隈はキリスト教系の大日本海外教育会においても八名からなる評議員のうちの一人であり、朝鮮半島における教育に关心を寄せていた。この当時外務大臣であった彼は五百子の光州実業学校設立の計画に賛同を示し、外務省機密費の支出が決定、隈板内閣の成立によって首相と外相を兼務することとなって実際に補助が始まった。しかし、隈板内閣はわずか四か月の短命に終わり、補助の継続が危ぶまれたものの、五百子は旧藩主の小笠原長生やそのつてで面識を得た近衛篤麿宛てに書簡を出して窮状を訴え、さらに直談判まで行い、継続が決まった。このような行動力はまさに五百子の資質によるものである。なお、補助金に関する記録はJACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081966400、韓国（朝鮮）ニ於ケル学校関係雑件（補助金支出之件）第二卷（3.10.2）（外務省外交史料館）として国立公文書館にて公開されている。注5でも見たように、ここでも外務省が出てくることから、朝鮮半島における教育において日本が影響力を保持しようとする動きがあったと考えられる。そういう意味では、五百子も本人の希望とは関係なく「帝国」のスパイ活動の片棒を担いでいたと言えるであろう。

うな組織化されたものとはその性格に大きな違いがあるだろう。

女性たち自身の組織化においては、やはり戦争がその契機となっている。すなわち、戦場にて傷ついた兵士たちを治療するための看護婦の養成が求められ、日本赤十字社篤志看護婦人会が明治20年代にはすでに成立していたのである<sup>7</sup>。世紀転換期にはその組織化が顕著となり、下田歌子のような女子教育者を中心に成立した帝国婦人協会（1898年）、先述の奥村を中心とした愛国婦人会（1901年）、そして冒頭でも少し触れた清藤秋子らの東洋婦人会（1904年）などがそれに当たる。それぞれの会は独立しているものの、その後ろ盾には侯爵夫人である鍋島栄子、子爵夫人である小笠原秀子といった貴顕にある女性たち、そして大物教育家といった、当時にあっては位階の高い女性たちが主導することによって、組織化されたわけであり、女教師を海外へと派遣する事業というのも、このような女性たちの組織化の動きと連動していたのである。

## 2. 教育者の海外派遣の必要性とアジアの「開導」者としての日本婦人

しかし、実際には女教師たちが派遣される以前から海外へと渡った女性たちは存在していた。すなわち、「からゆきさん」と呼ばれていた女性たち、俗に「賤業」とも言われた、売春を生業としていた女性たちである。彼女たちの存在は、日本国内において日本の「恥部」として当時からすでに語られていた。『女学雑誌』においてもしばしば取り上げられており、第265号（1891年5月16日）では「海外日本婦女子の醜聞」として社説、すなわち巻頭に掲げられている。「今や桑港プレチン新聞の一報によりて喫驚し、今日初めて起れるものゝ如く聴取せる同胞よ、願わくは之によりて公娼全廃の速かに行ふことを決意せよ。」とあるように、海外でさえ報道されていたことがうかがえる。さすがに『女学雑誌』では女性たちにその責を負わせるような論調はないが、第491号（1899年7月10日）には「片々」として他社からの引用として次のように語られている。

異様なる婦人の海外出稼奨励論　は憲政新聞によりて主張せらる。曰く、  
今や新条約の実施と共に内地難居の挙あるに當りて、婦人が徒らに海外に渡りて醜業を嘗むを恐るゝも、内地にありて是等の婦人が生計を得る能わずして、公然淫を鬻ぎ情を売るもの多きを見ば、其外人に対して醜態なるは同じく一なり、寧ろ這般無用的不生産的、劣等婦人は、此際宜しく海外の出稼移住を勧めて、以て善良なる同胞が内に在りて安心立命の地を堅からしむるに如かざるを知る。

彼女たちの多くは実際には悪い女衒に売られるなどして遠い異国で働くをえなくなったのであり、決して「劣等婦人」ではない。これは事実上の「棄民」であって、殖民という観点からは彼女たちの存在は無視されていた<sup>8</sup>。だが、彼女たちが常に日本の「恥部」でしかなかったか

<sup>7</sup> 有名な人物としては、新島襄の夫人である八重も入会していた。

<sup>8</sup> 大濱徹也『庶民のみた日清・日露戦争—帝国への歩み—』（刀水書房、2003年）に挿入された地図によ

というとそうではない。実際には海外での戦争において、彼女たちは貴重な現地協力者として登用されることもあった。例えば、日露戦争前夜に満洲で諜報活動を行っていた石光清真は、その遺稿である手記の中では、彼に協力した女性たちがしばしば登場しており、その多くはやはり日本から売られた女性たちだった<sup>9</sup>。また、少し時代が降るが、シベリア出兵時に諜報活動に従事した「シベリアお菊」こと出上キクなどは、実際に日本から正式に褒章を受け取っている<sup>10</sup>。しかし、彼女たちはたまたま現地で利用することが出来た、あるいは調達出来た諜報員であって、計画を持って送り込まれたわけではなかった。出上キクのように積極的に協力した者もいるが、言うなれば、彼女たちは「帝国」に利用されたのである。

計画的に日本から海外へと送り込まれた存在、それが女教師たちであった。当時からすでに教育者の海外派遣の必要性は他ならぬ教育者からも叫ばれていた。『新公論』第19年第3号（1904年4月）には、当時有力だった教育雑誌『教育時論』を発行していた開発者の社長で、自らも教育者であった湯本武比古が「戦後経営に対する希望」という記事を寄せており、その中で殖民について触れている。

#### 日本人が殖民に不成功なる原因

日本の中にも信州及飛騨人は遠くへ行くを厭ふのを風習あり、我が信州人の如き東京及信州に接せる地方には到る處信州人を見ざる無きの有様なれども支那、朝鮮、満州、北米、或は濠洲等に在るものは最も少なく只一日或は二日位にて帰り得る所にのみ行くを風習とせり、これ又山間に住む人の愛郷心に富み、常に故郷難忘の致す一例とすべし、僅か弾丸黒子の日本の中に於てすら、愛郷の念如斯異なり、況や全体に於て山地か海浜のみにて平原無く且つ地味気候山水何れの点に於ても、秀逸せる日本に住める人民が外国の殖民に不適当なるは、明白なりとす。

要するに愛郷心と殖民とは両立し難きものにして、日本人が今少しく愛郷心の乏しからんには、南洋の浜、ブラジルの辺にも殖民し得たらん。

#### 教育家を海外に移住せしむべし

然りと雖今日以後の国情はかゝる状態を許さず、世界の競争場裡に立ちて国民的發展を要する日本人は、かゝる固息退嬰の念慮を一掃し、従来の慣習を打破して永住の目的を以て殖民する心を養ふことは刻下の急務なり、（…）

而して我國民をして永住の目的を達せしめんには、同時に宗教家及教育家の渡航を促がさざるべからず、彼等移住者に趣味を与へ、彼等を根底より導くことに勉むるは宗教家教育

---

ると、1904年時点におけるシベリア在留日本人の数はイルクーツクのような奥地を除いてどの地においても女性の方が男性よりも多く、前記の「海外日本婦女子の醜聞」からも察するに、女性の場合の多くは「からゆきさん」であったと考えられる。

<sup>9</sup> 特に『曠野の花』に詳しい。

<sup>10</sup> 大場昇『世界無宿の女たち』（文藝春秋、2008年）第一章「女侠・シベリアお菊 出上キク」に詳しい。なお、この時に諜報活動を指揮していた特務機関を束ねていたのは、後の陸軍大臣・荒木貞夫であった。

家の任なり、現今少数の宗教家は朝鮮満州地方に滯在せるも教育家は未だ一人として、海外に於て其天職を尽し居るものなし、其結果は朝鮮を除て其他の各国には、日本人と云へば支那人同様に徒らに賃銭を貪りて帰国するものと誤解せられ、日本人排斥の傾きを生ぜり、これ則ち彼等が望卑く識無きの致す所にして外人の同情を失ふもの全く故無きにあらず、故に教育あるもの知識あるものが此等の殖民を開発し、思想を高尚ならしめ、知識普及の手段を講ずる必要上、宗教家教育家の海外渡航は刻下の緊急問題とす（…）

今や日本の教育界を通観するに、月に日に教員希望者は増加の傾きあり、中学校師範学校高等女学校教員の需要少くして、供給多く、小学校も亦同様にして、代用小学校現存するも、学校経営を施さば今日の如く多数の教員なきも可なり、さすれば資格あるも就職の道なきもの多数を生ずべし其中思慮分別あるものを政府保護の下に外国へ渡航せしむるは実際に必要なることにして朝鮮満州支那等へ、経験学識並び備へたるものを遺すは、将来の殖民政略上、且は勢力範囲拡張上欠く可からざる急務なり。（傍点は省略）

これが掲載された時にはすでに日露戦争は始まっており、そのような海外への気運の下にこの記事は書かれている。「戦後経営に対する希望」というのは、始まったばかりの日露戦争が終わつた後のことを想定しているのである。湯本の言に従うと、日本人は元来海外への殖民には不得手であるものの、現状はそれを許さず、日本人もまた積極的に殖民を行うべきで、その先導を果たすべき存在が宗教家や教育者といった、人民を啓蒙する立場にある人々なのである<sup>11</sup>。

また、それより以前、『女学雑誌』第418号（1896年1月25日）の社説「亜細亜の開導に於ける吾国婦人の責任」には以下のような記事が掲載された。

「日本婦人の有為なる方々の上には、今後一大使命、ひとしく下り来れり。即はち、かの東洋諸国の女性を開導するの責任は、實に此等の姉妹が担当せざる可らずと言ふことはれ也。」

「是等東洋諸国の婦人は、閉込められ、逆遇せられ、擯斥せられつゝあり。此等を開導するには、各々順序ありて決して突飛の誘引を為す可らず。」

「今や則はち吾国の姉妹の劣りなき興起尽力を求むべき時節となれり。姉妹諸君断じて此の嚴そかなる使命を忽諸に附すべからずる也。」

女性たちの組織化が多く見られるようになるのは数年先のことではあるものの、日本の女性たちが団結して他の東洋諸国を「開導」する責務を負っている、という論調がここには明らかであり、女性たちの組織化が期待されていることが分かる。先に挙げた湯本の論と併せて考えると、後の20世紀初頭にあって、「東洋諸国の女性を開導する」責任を負った日本の女性たちの中でも、特

<sup>11</sup> 事実すでに挙げたように、奥村兄妹は円心が東本願寺派の僧侶、五百子は教育者として朝鮮半島に渡っている。

に教師という存在が、その責務を果たすにうってつけの存在として考えられたであろうことは想像に難くないであろう。

### 3. 河原操子の内蒙派遣における国家の思惑と女性たちの連帶

おそらく単なる偶然であるが、前述の湯本が「遠くへ行くを厭ふのを風習あり」としていた信州人の一人に河原操子がいる。そして、この河原こそが当時の日本にあって最も「遠くへ行くを厭」わない女性であったことは皮肉である。彼女は下田歌子に憧れ、彼女の勧めで孫文が設立した在日華人のための学校、横浜大同学校<sup>12</sup>（現・横浜山手中華学校）で教え、上海に渡り、最終的には内蒙の王宮へと派遣されたのである。彼女については先述の先行研究等に詳しいためここで詳述することは避けたい。彼女が他の海外派遣された女教師の事例と著しく異なるのは、彼女がロシア与中国の境界にある内蒙という戦略上の重要地点に派遣され、そこで実際に諜報活動を行っていた点であり、ここでは帰国直後の彼女の弁から彼女が自身の派遣をどのように考えていたのか、という観点から、女教師の海外派遣事業における女教師自身の思惑について考えてみたい。

西本波太<sup>13</sup>が編纂した『小萩集』（帝国婦人協会出版部、1906年10月）という本の中に河原操子の「蒙古談」が寄せられており、帰国直後の河原の述懐が収録されている。彼女は「私は是の方々と色々御打合も致しましたり、其間に色々の事も御座いましたが、今は少し申上ぐることを憚ります。」（p.39）とはしているものの、同書の中で

其中には又日本の方も見えまして、無論日本人と名乗つては居られませぬ、服装も変へ、居所も離れ／＼で、私が中央に立つて、それ等の用事の取次ぎをするのに工合が好いので、出来るだけ致しまして急ぎのものは、熱河で電報を打ち、さして急がぬものは、喀喇沁の私設郵便で出すやうに話して居つた。其中に五六月の頃、西洋人が喀喇沁の王府に参つて泊り込んで、頻に運動して居る、用は礦山の事で参つたと云ふのですが、それは疑しいですから、何う云ふ処に手紙を出すか、其先を調べることに気を附け、王府の官吏及び王様との間は如何と云ふ様なことに出来るだけ気を附けたり、何に致せ日本人としては私獨で御座いますから、此地に於ける日本の利害は自分の双肩に担つて居る様に、何だか日本を背負つて立たなければならぬ様な心地がして、何事も思ふと同時に実行しなければならない、次の便になどゝ云つて居ることは出来ませぬ、其間に直ぐに手続をして騎馬で人を駆けさせる様なことも御座いました、ソシナ場合には、自分は到底生きては還れないと思つて、チヤンと覚悟を致し、荷物を整理し、尚ほ自分の手許に在る書類は、残して悪る

<sup>12</sup> 設立に当たっては元々孫文が中心にいたものの、戊戌の政変によって本国を追われることとなった康有為が来日すると、学校運営を巡って権力闘争が起き、最終的には康有為派が実権を握った。

<sup>13</sup> 号は翠蔭（1882～1917）。編集者としては彩雲閣、独立して易風社を興して雑誌『趣味』の編集人として活躍し、国木田独歩との縁で死後『趣味』で追悼号を出している。また、翻訳家としてはゴーゴリの「外套」を翻訳（『文藝俱楽部』、1909年）している。『二葉亭四迷全集 第7巻』（筑摩書房、1993年）は四迷の書簡を所収しているが、彼がしばしば西本と書簡を交わしていた様子がうかがえる。

いものは焼き、何時何う云ふことがあつても好い様に用意をして居つたが、今誰か「貴方を殺す」と言はれても、嫌ですが、人は其時になると、覚悟が出来るもので、何時死んでも支度が出来て居ると、死と云ふものは些も怖しく感じませんでした。(pp.66-8)

と書いており、諜報活動を行っていたこと自体は機密となっていないことに、後年の読者である我々は驚かされるが、すでに日露戦争の戦後処理も終了していたという事情もあるかもしれません。

私は前の年には、志士の方々を送迎し、後の年には、土地を調査に御出でになつた方々を御迎へして、王府との間に立つて幾分か御便宜を計ることが出来ました。此方々は半年余り居られ、詳しい調査が出来て居ります、未だ発表になりませぬが、不日発表されたら、私が今詰まらぬことを申上げませぬでも、立派な精はしい様子を御聞きになることが出来ませう。充分の調査が出来て喀喇沁でも大層喜ばれ、無論日本の為めにも充分なつて居ります、(…)(pp.71-2)

とも述べているが、同年に『清国内蒙古喀喇沁王部鉱業調査報文』という報告書が出ており<sup>14</sup>、おそらくは河原が述べているこの時の調査が元になって成立したものであると思われる。

多くの本の中では、王宮内は地勢上親露派が多く、王夫妻のみが河原の味方であったとしているが、実際はそう単純なものではなかったらしい。吉村道男氏の論文は、国立公文書館に所蔵されている外務省の資料を基にして書かれたものであるが、その中でも触れられているように、国王グンサンノルブは日露戦争以前に大阪で開催された第五回内国勧業博覧会（1903年）を通して日本の発展を目の当たりにしていたが、王妃は河原に対して簡単に胸襟を開いたというわけではないようである。

(論注：王妃) 曰ク須ク露ヲ助クベシ日本ノ如キハ十年前ノ仇敵ナリ (王妃ハ清帝ノ皇族ナレバナリ)。且一度露ト戦ハハ日本ノ小ナル勝チ得ヘキノ理由無シ。若シ誤ツテ之ヲ助ケ露ノ攻ムル所トナラハ如何スヘキ日本人ノ如キハ須ラク逐フベシト頻リニ王ニ迫レリ。河原女史初メ之ヲ知ラズ日ヲ経テ之ヲ聞キ大ニ驚キ日露ノ状態利害ヲ説キ其不可ヲ諭スモ急ニ意ヲ翻スノ状無ク河原氏ハ愈々煩悶シ事態如斯バ安然タルヲ得ズト『肅親王等ノ意見モ日本ニ在り』ト称シ種々ノ方面ヨリ論シテ事ヲ決セザラシメツツアル際第一ニ鐵道破壊ノ先鋒トシテ伊藤氏等北京ヨリ来リシニ其際モ尚之ヲサヘ拒マントスルノ状アリシモ其ト同時ニ肅親王ヨリモ特二人ヲ派シ王妃ヲ諭シ次テ又海戦ノ好成績ヲ伝ヘショリヤヤ其意を緩ニセシモ尚日本ノ克ツヲ信ゼザルコト久シク其後連戦連勝ノ報頻リニ至リテ纔カニ日本ニ依ルノ意ヲ決シタリト云フ<sup>15</sup>

<sup>14</sup> 全文が国立国会図書館の近代デジタルライブラリーにて公開されている。

<sup>15</sup> JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B04011142600 (第30画像目から)、蒙古喀喇沁王ノ依頼ニ

吉村氏はこの「見聞録」のみ使用しているため他の外務省所蔵記録には触れられていないが、同じく残されている資料に「対支借款関係雑件／蒙古ノ部 喀喇沁王公対正金銀行」<sup>16</sup>がある。日付は1905年3月であり、河原滯在時に日本が喀喇沁に対して横浜正金銀行を通じて財政的に支援していた証拠であり、河原個人の活動に帰せられるというよりは、内蒙古に対する工作が国家規模で行われていたと言えるであろう。横浜正金銀行と言えば、河原が帰国後に結婚した一宮鈴太郎はニューヨーク支店<sup>17</sup>の副支店長であり、喀喇沁と横浜正金銀行の関係から推察するに、河原の結婚自体が彼女の功績を労うために図られたものと勘織ることも出来るであろう。

実際、この喀喇沁と横浜正金銀行の関係のみならず、彼女の内蒙古派遣に関しては、多くの個人的ネットワークが張り巡らされている。下田歌子による推挙<sup>18</sup>、シベリア単騎横断でよく知られていた軍人・福島安正<sup>19</sup>や大陸浪人である川島浪速<sup>20</sup>ら同郷人の支援、そして元勤め先の校長の子息である脇光三の内蒙古での諜報活動の補佐、といったように、この派遣が極めて政治的なものであったことがこのこと一つ取ってみても明らかである。つまり、彼女は自身「蒙古談」の中で述べているように、常に日本という国家そのものを担っていたわけであり、同じ諜報活動を行っていても、前章で扱った「からゆきさん」たちとは立場が違うのである。

と同時に、彼女は自らが女性であるという点に自覚的でもあった。同じく「蒙古談」の中で彼女はこうも述べている。

女子の方は仕事と申しても大したことも御在いませぬが、男子の側で外国人を相手の事業を画策する場合に同胞互にこんな風では成功することも遂に破壊して仕舞う様なことも少なくあるまいと思ひます。(p.77)

控え目なようでいて、ここには並々ならぬ彼女の自負心が溢れている。「外国人を相手の事業」の中には戦争も含まれているかもしれない。直接戦場に立たない女性が国家に貢献出来る機会は限られており、河原はその数少ない機会を得ることの出来た女性であった。諜報を含め、女性である自分のなしたことを「大したこと」ではないとする彼女の言は、決して本心からのものではあるまい。

ここに女教師の海外派遣事業に与した女性たちの心情が集約されているのではないだろうか。

---

依リ本邦技師農業鉱山調査一件（1.7.7）（外務省外交史料館）。引用は吉村論文からである。

<sup>16</sup> JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04010740000、対支借款関係雑件／蒙古ノ部（1.7.1）（外務省外交史料館）。なお、対支借款関係雑件／蒙古ノ部の借款関連の資料は、全部で17点所蔵されている。

<sup>17</sup> 永井荷風『あめりか物語』にも書かれているように、この横浜正金銀行ニューヨーク支店は父・久一郎の斡旋で彼が滞米時の1905年12月から一年半勤務した場所であり、一宮は荷風の上司に当たる人物であった。

<sup>18</sup> グンサンノルブは来日時に下田と出会い、女子教育の必要性を認めたていた。

<sup>19</sup> 結婚を機にニューヨークに渡った彼女の叙勲に際し、代理で勲六等を受け取ったのが福島であった。

<sup>20</sup> 彼の養女が「東洋のマタハリ」として知られる女スパイ・川島芳子、本名愛新覺羅顯玗であり、肅親王の第十四王女である彼女は、すなわち肅親王の妹を妻としたグンサンノルブから見れば姪に当たる。

自分たちが行動可能な領域が限られている中で、「大したこと」は出来ずとも伸長の段階にあつた国家に貢献したいという思いが女性たちの内にも巻き起こったのではあるまいか。それが女性たちの組織化、ひいては女教師の海外派遣といった、男性たちの組織化の中で形成されたものとは違う形で顕現したと考えられるのである。

この点に関してもう一つ重要なことを示唆しておきたい。堀内氏が述べられているように、女教師の海外派遣に関してはケンブリッジ女子学寮出身の女校長たちが作る「ケンブリッジウーマン・ネットワーク」と呼びうる人的交流が大きく寄与していた<sup>21</sup>。『女学雑誌』第273号（1891年7月11日）雑録に「英國女子大学の女生」という記事が掲載されており、イギリスの女子高等教育事情が詳細に書かれている。

一八六七（廿五年前）と云ふ年は、女子教育上に大記念を表すべき年なり。之より先き、エミリー・デビス嬢一と方ならぬ尽力にて、カムブリツチの大学が其地方試験と云へるものを、十二才乃至十八才の童児及女生徒に施こし、及第したる者は、都に上り、カムブリツチに入りて講義を聴くことを得るの仕組に為さんことを欲せり。（…）之よりして長足の進歩年々に成就し、其翌る年はエミリー、デビス嬢が手にてビツチンに女子大学の基礎を置きぬ、此校後にカムブリツチの追々、ギルトンに移り、今のギルトン女子大学校となりぬ。又、教授シジウイツリ氏、此時女生の寄宿舎を設け、クラウ嬢が監督の下に置きけるが、此舎更に発達して今のニウンハム、女子大学とはなりぬ。<sup>22</sup>

文中の「ギルトン女子大学」、そして「ニウンハム」に当たるのはそれぞれ、ケンブリッジ大学のGirton College、Newnham Collegeであり、この二校が当時イギリスにおいて女性において門戸を開いていたカレッジで、日本においても早い段階すでに紹介されていたことが分かる。

日本からイギリスに渡った数少ない女性たちも、これらの学校を視察している。下田歌子は1893年から一年以上にわたる欧米教育視察を行った。帰国後彼女は華族女学校学監として「巡遊中の所見」を『太陽』記者に語り、それが「西洋の女子教育と家庭」という記事となり、『太陽』第3巻第8号（1897年4月）に掲載された。その中で特に英国を始めとした欧洲諸国における「家塾制の発達」について述べている箇所がある。「家塾」というのは聞きなれない言葉であるが、これがすなわち寄宿できる学校のことを示しており、女学校ではその嚆矢たる「チャルトナム」の「ミッス、ビール」について河原は言及している。この「ミッス、ビール」とは

<sup>21</sup> 『大英帝国の女教師』pp.172-174

<sup>22</sup> Girton College、Newnham College以外のものも同定しておきたい。「エミリー・デビス嬢」はGirton Collegeの創設者Emily Davies（1830—1921）であり、彼女は1869年にHitchin「ビツチン」にてGirton Collegeを始めた。「教授シジウイツリ氏」ことHenry Sidgwick（1838—1900）はこの時Trinity Collegeの若き哲学者で学監でもあり、Cambridgeにて始まったばかりの女性のための講義を先導した。「クラウ嬢」Anne Clough（1820—1892）は湖水地方で学校を経営していたが、Sidgwickによって登用され、女性のための寄宿舎を開いた。これが後のNewnham Collegeへと至るのは引用文の通りである。詳細はJudy G. Batson, *Her Oxford* (Nashville : Vanderbilt University Press, 2008) pp.9-14に詳しい。

Cheltenham Ladies' College (CLC) 校長の Dorothea Beale (1831~1906) のことであり<sup>23</sup>、下田は滞英に際してビールに恩恵を受けた。また、安井てつは下田のような視察とは異なり、正式にケンブリッジに留学したのだが、その留学時に Elizabeth Phillips Hughes と親しくなり、後の Hughes の来日（1901 年）時には彼女の全国視察のともをし、通訳を買って出た<sup>24</sup>。イギリスの女性教育者たちとのこのような交流は、果たして個々人で完結する類のものであろうか。

先に鍋島侯爵夫人・栄子らを中心として、国内において「上から」女性の連帯を築こうとする動きがあったと述べたが、ここで挙げたような海外の女性教育家たちとの関係をも視野に入れるに、ここには堀内氏の述べている「ケンブリッジウーマン・ネットワーク」を日本の女性教育者たちが求めた、言わば日本支部とも言うべきイギリスの女性教育者たちとの連帯もあった、と考えられる。河原の背後にあった人的ネットワークについて先ほど述べたが、彼女のそれは同郷の有力者たちを元にした地縁的なものが表には顯れているものの、女教師の海外派遣という観点に即して見ると、より大きな、世界規模の人的ネットワークを背景としていたとも言えるのである。イギリスの女性教育界とのパイプで繋がれた女性教育者同士のネットワークに関しては、今後さらなる研究が必要であろう。

#### 4. 海外に渡る女性を捉える視線

主に河原を事例にこれまで述べてきた。河原は帰国後に勲六等を授かっている。河原の友人で、婦女新聞社社長夫人である福島貞子は、「教育上または社会事業上の功労によって、叙勲せられた婦人は、かなりおり、また戦時傷病兵の看護に従事した廉によって、勲章をいただいた赤十字看護婦も多数ありますが、それ等とは全く異り、純然たる軍事上の功労によって、婦人が叙勲せられましたのは、我が國に於て河原操子の君が最初なのです。」<sup>25</sup>と、河原の叙勲がいかに誇らしいものであったかを語っている。河原とともに諜報活動を行っており、その後ロシア側に捕縛され、処刑された横川省三、沖禎介兩人は、その最期の潔さをロシア側からも畏敬の念を以て迎えられ、日本でも大いに称賛されたものの、ともに勲五等であったことを考えれば、確かに「非常な名誉」であったと言えるだろう。

ところが、当時東京朝日新聞の記者であった渋川玄耳は、『朝日新聞』に寄稿した自身の記事

<sup>23</sup> 彼女については、本報告書の講演録にもある、1874 年に結成された「女校長協会」に集った 9 人の女校長のうちの一人として『大英帝国の女教師』でも紹介されている。

<sup>24</sup> 彼女はこの来日時に帝国大学の授業を安井とともに無断で参観しているが、その講義を行っていたのが小泉八雲ことラフカディオ・ハーンであった。この当時のハーンは大学側の外国人教師削減の方針に疑心暗鬼になっており、彼女のことでも大学側のスパイと疑っていた。実際、1903 年 1 月に学長の井上哲次郎から解雇通知を受け、Hughes がスパイであったことを確信するが、Hughes 自身は自分が疑われていることを知り、マクミラン社を通じてハーンに手紙を送り、疑惑の払拭に努めている。真偽については今も不明のようである。(関田かをる『小泉八雲と早稲田大学』恒文社、1999 年参照) なお、日本における Hughes の影響として「近代体育教育」「新教育運動」「美術教育史」という三点が主に取り上げられるが、この Hughes の影響について網羅した論考として、佐藤淳介「E. P. ヒューズの経歴と日本における教育活動」(『大分県立芸術文化短期大学研究紀要 34』1996 年) が挙げられる。

<sup>25</sup> 『カラチン王妃とわたし』(芙蓉書房、1969 年) p.102。なお、初出は『日露戦争秘史中の河原操子』(婦女新聞社、1935 年)

をまとめて『閑耳目』(春陽堂、1908年)として出版しているが、「支那輸出女教師」と題して以下のような厳しい指摘をしている。

原文ママ  
川 原女史、安井女子の風を聞いて起つ女学生が近來多く為つて來た。二三の女学校では支那語が課目に入つて居る。<sup>あひだ</sup>或は、琴、茶、挿花の稽古の代りに支那語の私塾に通ふ者もある。併し是は考へものだ、外国に往て教育事業に従事せうと為らば、三年や五年の短時日を期しては到底効は挙るもので無い、最初の二年位はまづ先方の言語風俗を覚えるに費やさねばならぬ、と言ふのは支那に於る女子教育は当分の内小学教育であるから、十分に支那語に通じ且彼地の家庭の習慣等も呑込まれねばならぬのである。(...) 本気に教育家として行らうとするには是非共前記の予備が要る。少くとも十年以上は彼地に居る積で無くてはならぬ。左すれば二十歳より渡航しても三十歳に為るから嫁期は失して了ふ。

○一生不嫁の決心を以て献身的に支那の女子教育に尽くすといふ女丈夫も必要ではあるが、二三の人の成功を羨みて、当時の事情、今後の変遷に留意することなく、漫然支那に行くわ、位の上ッ調子で支那語の稽古にあたら貴重の日子を費す人がありますまいか。課目として支那語を授くる学校などでは善く／＼生徒の意向決心を確かめて呉ぬと可哀相だ。不親切だ。

(pp.137-9)

結末を見るに、この文章はその当人というよりは、送り出す方の学校の覚悟について書かれているようだ。一生を当地において「不嫁」で過ごす覚悟がなければ行ってはならぬ、というのは、当時の女性に対しては非常に酷な注文である。そして、河原のような成功者さえ、帰国後に結婚すれば、同書中の「有夫の婦の成功」では以下のような揶揄を受けることになる。

某女塾を訪ふ、隣室に女生徒等の私語くが聞ゆ。話題は河原操子女史。

『お目出たいわ。

『亞米利加……好事のこと。

『だつて彼の方、十年の苦酸無意味だつたわ。今に為つて嫁く位なら。

『下田先生お力落ちやなくつて、肝要のお繼承者を失して……

『下田先生だつて嫁いた方よ。三輪田先生も亦然よ、奥村さんはまだ良人がお在ですつて。河原さんのお話が何かの雑誌に此んな例を引いて、女が婚姻したからって事業の成ないことは無いつて。

予は覺りぬ。這は彼等に取つて目下の一大問題たることを、併し河原女史の説は強弁に過ぎず。婚姻せる婦人の事業に成功せるは——彼の引例に依るも——夫の死したるときか、又は夫を無視せる場合に限れるものならずや。(pp.246-7)

下田は下田歌子、三輪田は現在の三輪田学園の創設者である三輪田真佐子、奥村は奥村五百子である。下田も三輪田も早い時点で夫に先立たれており、奥村も離婚している。しかし、この女生徒たちの問題意識は今婚姻状態にあるかどうかではなく、一度でも嫁いだことがあるかどうかにある。そして、当然忘れてはならないのは、これは本当に女生徒たち自身がそのように考えているというよりも、作者である渋川の考え方であるということだ。河原操子が結婚したことに託けて、結婚した婦人にとっては、その結婚が足枷となってその職を全うすることができないと述べているのである。河原の場合は結婚と同時に渡米したためにしょうがないとしても、この渋川の言は飛躍しすぎての嫌いがある。河原の後任の鳥居きみ子は、行きは確かに単身ではあっても夫の龍蔵とともに赴任しており、おそらく渋川はそれを知っているにもかかわらず自身の論のためにその事実を無視している。実際当時共働きのいわゆる「有夫教員」はいくらでもいたが、「有夫の婦の成功」が果たして可能であるのか、という結論が最初から用意されている論のためにこれもまた無視されている。

渋川が見せているこれらの態度は何を示しているのであろうか。それは、海外への渡航など、当時の女性にとっては安易な考え方の下に行うべきではない、という規制であり、また、どこまでいっても結婚というものがまとわりつくという現実である。

渋川の見方は一面的ではあるものの、彼個人だけにとどまるものではない。当時の文学作品の中で海外へと女性が渡航するという結末が多用されたのも、この見方と無関係ではあるまい。冒頭で海外に職業婦人が渡るという結末を持った作品が一定数存在すると述べたが、いくつか本文を引用しながら例を挙げてみたい。

教師同様専門職である看護婦は、先述のように最初期に女性のための団体として組織化された、そして実際日清・日露戦争の戦場へ、すなわち海外へと渡航していただけあって、海外へと派遣される看護婦が登場する作品がいくつかある<sup>26</sup>。そのうちの一つが家庭小説の代表例としてよく挙げられる菊池幽芳の『己が罪』(『大阪毎日新聞』前編 1899年8月17日～10月21日、後編1月1日～5月20日)である。女学生である主人公・箕輪環の波乱に満ちた生涯を描く本作の中で、環は「赤十字の篤志看護婦となりて、父が四十九日を済ませる後、只一人かい／＼しく台湾の空には向えるなりき。」<sup>27</sup>と、夫・隆弘が印度へと出奔した後、自身も海外へと渡る。台湾全島に響き渡るほどに看護婦としての名声を得た彼女は、夫が西貢<sup>サイゴン</sup>で伝染病にかかり明日をも知れぬ状況にあるという知らせを受けて駆け付け、献身的な看護の結果夫は一命を取り留める。

<sup>26</sup> 日露戦争時にはアメリカからマギー女史（天文学者にして、黒岩涙香訳『暗黒星』、原題 *The End of the World* の作者としても知られるサイモン・ニューカムの娘）が看護婦団を率いて来日したことが新聞報道によって話題になるなど、この時点では日本はむしろ看護婦を派遣される側であった。史実として日本からの従軍看護婦の海外派遣が本格化するのは、1908年の戦時救護規則の改正によって「平時ににおける戦時準備」という意識が浸透してから後であり、その実践の機会は6年後、第一次世界大戦の勃発によって訪れた。看護婦たちは戦場となった中国ドイツ領である青島に派遣され、また、ロシア、フランス、イギリスといった直接は戦闘に加わっていない欧洲にまで派遣されたのである。詳細は川口啓子・黒川章子編『従軍看護婦と日本赤十字社 その歴史と従軍証言』(文理閣、2008年) 第I部「従軍看護婦派遣の歴史的変遷」参照。

<sup>27</sup> 引用は『大衆文学大系2』(講談社、1971年) p.473

隆弘は回心して妻と日本に戻り、物語は幸せな結末を迎える。この作品の場合、主人公が看護婦として海外へと渡るという行為は特に否定的な意味には捉えられていない。「前途に只闇黒をして何ものをも有せざる」隆弘が印度へと出奔したのに対し、環は「今は一道の光明を認めて、少からぬ慰安を得」、自ら望んで篤志看護婦となったのであり、同じく海外へと向かった両者は、自ずからその目的に差異がある。ここでは環が海外へと渡るという筋書きは、環の艱難に満ちた生涯を表す一つの挿話としてしか機能しておらず、また、彼女は台湾でも名声を得るほどの活躍を成し遂げているのである。

同じくヒロインが看護婦として海外へと渡るという筋書きを持つ作品に二葉亭四迷の「其面影」(『東京朝日新聞』1906年10月10日～12月31日)がある。嫉妬深い妻を持った小野哲也は、妻の妹である小夜子に心惹かれていく。ある日、大陸の学校への異動の話を受けた哲也は次のように考える。

此頃は此狭溢<sup>せせこま</sup>しい日本が厭になり、寧<sup>な</sup>そ小夜子を伴<sup>とも</sup>れて、伯刺西爾<sup>ブラジル</sup>へでも秘魯<sup>ペルー</sup>へでも渡り、知らぬ外国の在郷で林檎でも作つて一生を送りたいなどゝ空想に耽るのであつたが、小夜子も是は同感で、時々夢のやうな事を語り合つて纔に現実の苦を忘れてみた。然るに今や其<sup>あ</sup>予期にもしなかつた機会が端なくも到来した。若し此機会に乗じて日本を去る時は、縦<sup>よ</sup>し西と東と方角は違つても、傭教師の煩しさは農夫の気安さに及ばずとも、身辺一切の葛藤<sup>こずひ</sup>を超脱して自由の新生涯に入ることを得るは一つ。あゝ、我運命も愈笑ひ出して來たぞと、哲也は心中では雀躍<sup>さきどり</sup>する程嬉しかつた (...)<sup>28</sup>

「其日は昨日に引替へて陰気な一日であつた。(第58回)、「其翌日は氣分殊に勝れなかつた」(第61回)と鬱々としていた日々は、この機会を前にして一転する。海外に行くことは、小野哲也にとって現状からの脱出であり、小夜子とのままならぬ関係の打開への契機となり得たのである。同じく男性が海外へと渡る作品に島崎藤村の『破戒』(1906年)がある。主人公・瀬川丑松はテキサスへと行くことが明らかにされて物語は閉じる<sup>29</sup>。「新平民」という出自を露呈した丑松にとって、テキサスという地は誰も自分のことを知らないという点でまさに「新天地」であった。

しかし、哲也の野望は破綻する。姉との間で板挟みとなった小夜子は姿をくらますのである。失意のうちに大陸へと渡った哲也ではあるが、やがて家族への仕送りも滞るようになり、ついには連絡を絶ってしまう。

小夜子が病院船満洲丸に乗組むで白の看護服を着てゐたといふは或は事実かも知れぬ。(第77回、p.401)

<sup>28</sup> 引用は二葉亭四迷「其面影」『二葉亭四迷全集 第一巻』(筑摩書房、1984年) 第61回、p.p.362-3

<sup>29</sup> 丑松のテキサス行きに対する考察は高榮蘭「「テキサス」をめぐる言説圏—島崎藤村『破戒』と膨張論の系譜」(金子明雄・吉田司雄・高橋修編『ディスクールの帝国—明治30年代の文化研究』新曜社、2000年に所収)に詳しい。

噂でしかないが、小夜子が大陸に向かう船の上にその姿を認められたとある。しかし、なぜここで「看護服を着て」いる必要があったのだろうか。それは、これまで見てきたように、単なる女性が当時にあって海外に渡るということはありえないことだからである。リアリティを持たせるためには少なくとも何らかの職業を女性が持っている必要があり、「看護服」という分かりやすい記号によって、ここではそれが保証されているのである。小夜子のこの姿から明るい未来を見出すことは不可能であろう。看護婦として海外へと渡るという事象は、『己が罪』とは異なって、ここでは恋に破れた者が大陸へと渡ってそのまま消えゆくという未来を暗示しているのである。

田山花袋「女教師」(『文藝俱楽部』1903年2月)では、妻帯者である主人公に心を惹かれるものの、その妻の自分に対する優しさ、そして狭い村の中であるがゆえに二人の関係が噂となってしまう状況に耐えかね、女教師は一人村を後にする。数年後温泉地でばったり再会した二人ではあるが、主人公の妻は女教師の出奔とほぼ同時に出産が原因で胎児ともども亡くなっているために、二人を遮るものはもう存在しないにもかかわらず、長年の隔たりはそれを許さない。

聞くところによると、女は今度台湾に行くので、その日本の名残を惜む為めに、一週間の予定でこの海岸に遊びに来たとの事である。

『何うせ、身体が悪いのですから、彼方の土になるものと覚悟して、参りますのですけれど……』

と淋しく笑つた。(…)

僕は答ふべき術を知らなかつた。それは、不意の暴風雨が俄かに烈しく僕の胸中に渦き起つたからで、僕は再び善惡是非の差別を忘れやうと為た。かの女は飛ぶ鳥のごとく自由である。そして自分は何を苦んで、今猶その感情の迸出するのを抑ゆる必要があるか。何を苦んでこのあはれむべき女を台湾の暑いところに遣るの必要があるか。<sup>30</sup>

骨を埋める覚悟で台湾に渡航するという女教師の行為が主人公にとって肯定的に捉えられていないことは明らかであろう。「淋しく笑つた」女教師を「あはれむべき女」と捉えるのが主人公であり、そしてその背後にいる読者たちもこの女教師の悲壮な覚悟をペシミスティックに読み取るであろう。

同じく女教師が新設の満洲へと渡る小栗風葉の『青春』(「春之卷」1905年3月5日～7月15日、「夏之卷」同年7月15日～12月29日、「秋之卷」1906年1月10日～11月12日)の連載は、まさに河原や鳥居が女教師として海外に渡航していた時期であり、鳥居に至っては、『青春』も終盤に差し掛かっていた1906年3月8日から8月29日にかけて同じ『読売新聞』に『蒙古行』なる旅行記を寄稿していた。ゆえに風葉は鳥居が単身内蒙ゴーへの旅を敢行したことは知っていたはずである。

---

<sup>30</sup> 引用は『定本花袋全集』第14巻(臨川書店、1994年) pp.541-2

そうであるはずなのに、『青春』の結末にて満洲に新設された女学校へと赴くヒロイン・小野繁の姿にはどうしても勇敢さをそこに認めるよりも恋に破れた結果という印象を抱かざるを得ない。確かにそこに「新しい女」の姿を見る先行研究があるものの<sup>31</sup>、関欽哉との恋に破れたという経緯、内心見下していた二宮という独身の女教師が結婚した姿を二人の前に見せるという別れの場面における挿話、そして、欽哉が墮胎の罪を一人でかぶって服役し、尾羽打ち枯らしてなおも「小学教師なり、何なり、敗卒は敗卒相応な為事を見付けて、田舎で最う果てた方が平和でせう。」<sup>32</sup>と、国内での小学校教師の職を「敗卒」にふさわしい職と位置付けている一方、女性である繁が生計を立てるために様々な「生活の困難」を経験して最終的には国外へと職を求めるという、男女の非均衡などから考察すると、小野繁の満洲行きには肯定的な意義を見出し難いと考えられるのである。

『蒙古行』刊行に当たって附された例言には以下のようにある。

我国の婦人は進取勇敢の気象に乏しとの非難頻りなる時に當つて、鳥居君子女史が年若き一婦人の身を以て良人に先ち単身蒙古に入られたるは、當世の珍とするに足るべく、以て婦人社会に於ける消極退嬰の弊風を打破するの功あらん、これ吾社が嘗て女史の紀行文を新聞紙上に連載し、今復之を一冊子として世に紹介する所以なり。<sup>33</sup>

このように女性の身で単身海外へと渡るという行為が評価されているにもかかわらず、何故に同時期に同紙上を飾っていた『青春』は女性の海外渡航に否定的な意図を持たせるような構造にしたのであろうか。

小谷・オロドンナ両氏も述べているように、『蒙古行』には「泪」がしばしば登場する。それは「うれし泪」である場合も多いが、望郷の念から涙を流す場面も幾度となく登場する。例言は單行本化に際して附されたものであり、確かに鳥居の行動にはそういった側面もありはするものの、実際に鳥居が書き留めているのは、日本に残してきた赤子を想っての真直な心情の吐露などであった。それを以てして彼女の行動を否定的なものとして断じるわけにはいかないであろう。ではあるが、鳥居が「泪」を強調すればするほど、読者はその旅程のつらさに同情するであろうし、やはり女性が単独で海外へと渡航することの困難さをそこに見出すであろう。筆者は『蒙古行』を読むことで契機を得て、風葉が『青春』において繁に満洲行きという展開を与えた、とまでは断ずるまでには至らないものの、すでに欽哉との関係において多くの辛苦を舐めてきた繁が

<sup>31</sup> 戸松泉「小栗風葉『青春』の繁」(『国文学 解釈と鑑賞』1980年3月臨時増刊)、岡保生「繁、そして小夜子、美禰子ら」(『文学』1986年8月)、真鍋正宏「小栗風葉『青春』／議論の活用—明治大正流行小説の研究(六)一」(『人文学』第161号、1997年)などは「教師」として自立する繁を肯定的に捉える立場にあり、武藤史子氏は若い男と関係を持ったために失職する二宮や、田舎で教師をしながら家庭を養わざるを得ない友人の姿こそ、ありうべき繁の未来像とはいえないだろうか。」(「小栗風葉『青春』試論—肉欲の行方を中心に」『国文論叢』2004年3月)と部分的には否定的な解釈をしている。

<sup>32</sup> 『青春』「秋之巻」第14回、引用は小栗風葉『青春(下)』(岩波文庫、1953年) p.168

<sup>33</sup> 引用は『明治シルクロード探検紀行文集成 18 鳥居きみ子「蒙古行」』(ゆまに書房、1988年、ページ数無) から。

最終的にどこに至るのか、という点において、女性の単独での海外紀行という、同じ媒体に掲載されていた作品は、魅力的に風葉の目に映じたのではないかと考えている。その手記の当事者が自身の旅に多くの「泪」を忍ばせていることは、繁の先行きをも暗示しているのではないだろうか。

## 5. おわりに

本稿では女教師の海外派遣という世紀転換期の日本において見られた事象を取り上げ、さらにその行動の表象化について考察してきた。対清・対露という対外戦争を経て急速に「帝国」化を遂げる日本を背景として、女性たちは進んで組織化を図っていき、協力体制を敷いていった。それは、兵士として直接的には与し得ない女性たちがとった、最善の方法という観がある。そして、そこにはアジアを背負うという役割を自認する日本が透けて見えるのであり、女教師たちはアジアを「開導」するために現地で指導を行うという責務を負ってもいたのである。その任務地の地勢上、河原の例のように実際に諜報活動を行った者もいるが、それもまた責務の重さゆえであり、そこに河原は女性としての矜持を見出してもいた。

しかし、このような同時代の女性たちの動きは、彼女たちの思惑とは関係のない解釈をしばしばされることとなった。作家たちにとって、女性が単独で海外へと渡航するというモチーフは、しばしば筋書きにとっていいように解釈された。ある時には女性の経験する艱難辛苦の一環として、そしてある時は恋に破れた者たちの敗路として——。作家たちも、同時代の女性たちの行動が決して自分たちの作品の中で見られるようなものでないことは分かっていたはずである。新聞紙上の論調を見ても、海外への渡航は日本に貢献するものとして称賛されこそすれ、非難されるいわれはなかった。しかし、作家たちにとって同時代に見られた現象は、運命に翻弄される女性を描く上で都合のよい展開を可能にしたと言えるのではないだろうか。そのために、現代から照射すると、そこには現実と創作との間に埋め難い大きな乖離を認めることが出来るのであり、その落差ゆえに現代の我々は、当時の女教師派遣事業が果たした役割、そこに賭けていた女性たち自身が顧みられることのない現状<sup>34</sup>に改めて思いを馳せるのである<sup>35</sup>。

<sup>34</sup> 例えば河原操子の場合、彼女をモデルにして作品が作られるということはこれまで何度も何度かあった。女性作家・長谷川時雨は『春帶記』(1937年)の中で「操子ときみ子」という作品にしており(収録されている12作品中一番長い)、歴史評論家の田中正明は河原を中心人物として『アジアの曙 憂国の挺身』(日本工業新聞社、1981年)を著している。また、近年佐和みづえ『草原の風の詩』(西村書店、2010年)が出たが、帯に書かれている通り、この作品も河原をモデルとして書かれたものである。しかし、保田與重郎が『新日本』1939年2月号・3月号に掲載し、後『改版 日本の橋』に収録された「河原操子」は、「その愛情が、そのままヒュマニズムとして、又国家の理想と合致してゐたのである。」(引用は『保田與重郎全集 第4巻』講談社、1986年、p.201)という部分に如実に表れているように、軍事拡大路線の時代にあっては河原の行動が過度に賛美される嫌いもあり、また、『アジアの曙』の作者である田中は満川亀太郎設立の興亜学塾出身で、どちらかと言えば右翼的な立場にある人物であったことも考慮に入れるならば、解釈する側の見たい側面だけを肥大化することで、それはやはり河原の行動がいかなものであったかを考えるに当たっては姿を歪めるものとなってしまっていると言えるであろう。

<sup>35</sup> 当時、女性が海外へと赴く作品の全てがその行動を否定的に描いたかというとそうではない。そのような例外的な作品の一つが大月隆『臥龍梅』(文学同志会、1906年、後1910年に『旅の佳人』と改題、再版)である。その分析については別稿を用意する。